# 伝記良寛さん―中編　僧として

前編で語りました文芸（漢詩、和歌、俳句、書等）の良寛さんは有名ですが、それでは僧としての良寛さんはどのような人だったのかを語ります。

良寛さんは越後の出雲埼の名主橘屋山本以南（新左衛門・泰雄）の長男として宝暦八年（１７５８）に生まれ（出家前の名は栄蔵・文孝）、国学と漢学（儒教・荘子）を学び、十八歳で名主見習いとなりましたが、仕事が合わず一時家出し、その後地元の曹洞宗（禅宗）の光明寺で出家します。

出雲崎は現新潟県三島郡出雲埼です（後掲の略図を御参照）。当時は佐渡より金を運ぶ船が入港する港町で繁栄していました。

家族は父親、母親と男兄弟四人と女姉妹三人です。

家の家業の名主職は良寛さんが出家しましたので次男の由之が継ぎました。

そこで光明寺に来ていた備中玉島（岡山県倉敷市）の曹洞宗円通寺の大忍国仙和尚の弟子になりました。国仙和尚は曹洞宗で高位の和尚です。

玉島の円通寺で禅修業をします。二十二歳から三十三歳までです。

国仙和尚から印可を受けます。これで修行僧を卒業して正式の曹洞宗の僧になったのです。

法号大愚をもらいます。しかし良寛は大愚良寛を名乗りません。自らは沙門（しゃもん）良寛を名乗ります。沙門は僧の意味です。

師の国仙和尚からは「愚のように見えるが大成している。凡人にはそれが判別できないであろう。」との内容の詩偈（しげ）が与えられました。詩偈は印可の証明書のようなものです（漢詩です）。

更に一寺の住職となり和尚（おしょう）の称号を得るには本山の越前永平寺で修業する必要があります。これは形式で、永平寺で一日修行（一日住職と言います）すれば和尚位（瑞世）はもらえ、どこかの住職に任命されます。

良寛さんはどの僧も歩むこの道を取りませんでした。

遊行僧となって西日本を行脚托鉢（あんぎゃたくはつ）します。

どうしてかです。

当時曹洞宗（禅宗）は越前の永平寺と能登の総持寺との間で本山争いがあり宗門の頽廃、良寛さんの本山永平寺も内部での僧位争いが激しく、又僧位に就くには金銭を納める制度が出来てしまっていました。

和尚位を得る時には二十両（二百万円位）を本山に納める必要がありました。良寛さんの実家は名主ですのでこのくらいの金銭は払えますが、これを嫌ったそうです。

住職になってその上の大和尚位になるには本山への寄進が必要です。そのために住職は檀徒に多くの法事をしいて布施を得ることに励みます。

僧、住職は生きている人間の救済の仕事をしません。

本寺と末寺の統制の強化と葬式仏教になってしまっていたのです。

良寛さんは曹洞宗の祖師道元と釈迦の教えに基づいて修行を続けることにします。

すなわち乞食（こつじき）で遊行（ゆぎょう）することです。釈迦の教え通り生産の仕事にはつかない、僧伽（寺）を持たない。布施だけで生きる。僧に布施することはその行為でその人は救われる。一般の俗人には道元の教えに基づき自愛を持って接する。

円通寺と縁を切り三十三歳の時に乞食遊行（こつじきゆぎょう）に出ました。

四国、京都、難波、河内、高野山、吉野、長谷寺、奈良、宇治、比叡山等々で三十九歳の時に越後（新潟県）の糸魚川（いといがわ）に着きます。そこで地元の人の紹介で生まれ育った出雲埼に近い国上山（くがみやま）の中腹にある五合庵に住むことになります。寛政九年（１７９７）のことです。

後掲の「良寛さんの越後（新潟県）関係略図」を参照ください。

頂上にある国上寺（こくじょうじ）（真言宗）の付属の庵です。たまたま空いていたのです。

各地を回って真言宗、日蓮宗、浄土真宗の寺々や高野山、延暦寺を訪れても曹洞宗本山の永平寺には行きませんでした。よって住職の資格（和尚）は得ていません。あえて資格を得ませんでした。

円通寺の修行中に母親を亡くし、遊行中に京で父親（以南）が京で亡くなり、越後に帰ってから直ぐに弟二人（三男と四男）を亡くしました。

名主職を継いだ次男の由之とは終生仲良く付き合いますが、由之はまもなく

名主職を罷免されます。地元の町民とのトラブルが原因です。

良寛さんはその思想を漢詩、和歌、俳句、あるいは文章にしました。
また村々の人々と交わることでその思想を身をもって伝えました。
それは説法ではありません。人とのふれ合いの中で慈愛が大事であることを身をもって示しました。文章は他人への戒めではなく、自戒としています。
これを友人たちが持ち出し書きとめまとめたのです。
それでは良寛さんの思想からその教えを見てみましょう。

○「如何なるが　苦しきものと　問ふたらば　人をへだてる　心とこたへる」

○「濁る世を　澄めともよばず　わがなりに　済まして見する　谷川の水」

五合庵のせせらぎの清水はこの汚れた世間に向かって、「清くなれ」などと叫ぶことはない。それでも川の流れは黙ってその世間の中でも低い方へ低い方へ流れて行くうちに、自ずと世界を浄化してくれる。

（阿部龍一訳）

○「うらをみせ　おもてをみせて　散るもみじ」

晩年の句です。解釈は皆さんで。

○「世の中に　交わらぬとには　あらねども　一人あそびや　われにまされり」

裏の意味を憶測しますと、「腐敗教団とも交際しないことはないが、自分は乞食の修行と詩歌の道を歩むでしょう」か。

良寛さんの漢詩は７５４首、和歌１４１５首を作られたと言われています。その中から思想が分かって、本当に有名なものだけを取り上げました。

良寛さんの思想を知る文章が残っています。
「戒語（かいご）」です。いましめの言葉です。他人への戒めではなく自分への戒めとして残されました。
人と話すときに注意すべき話、言葉、言葉遣い、心配りを書き留めています。

九〇カ条に及びますがここでは一部を記述します。

「言葉多き・口の早き・話の長き・心にもなきことを言う・負け惜しみ・人の言葉を笑う・人の傷つくこと言う・人の嫌がることを言う・人の困ること言う・鼻であしらう・自慢話・話の腰をおる・人を侮る」等などです。

これを心して他人と話すことは厳しいですね。

この外に良寛さんの思想を知らしめる「愛語」があります。

鎌倉初期に道元が著わした「正法眼蔵」の記述から書き写し沙門良寛謹書と署名されたものが残っています。

相手をやさしく思いやる言葉と言う意味です。それは相手をやさしく思いやる心、愛から生まれます。

愛語の全文は後掲します。

良寛さんの僧としての特徴を記しましょう。

良寛さんは曹洞宗（禅宗）公認の僧ではありますが、住職の資格（和尚）がありません。従って寺を持ちません。

法事をしません。弟子を持ちません。説法（説教）をしません。布教活動もしません。

本人は「俗に非ず、僧に非ず」と言っていました。

一修行僧の立場で托鉢して村人に接します。自分だけの食料と生活物資と一人が暮らせる住まいがあればよいのです。喜捨だけに頼って生きていきます。

しかし良寛さんの支援者は越後の村々の有力者（庄屋、商人、医者、僧侶等）多くの人がいます。この人たちが生活物資を寄進しますので、一人での生活には困らなかったと思います。

有力者は良寛さんの幼い時からの友人知人そしてその息子が多いのです。

ここでは一人ひとり名を上げませんが、一人だけすべての伝記の元になった「良寛禅師奇話」を書いた解良栄重（げらよししげ）をあげておきましょう。父親は良寛さんの古からの友人で、栄重は若いころから良寛さんに信奉していました。良寛さん没後の一八四七年に伝記を著しました。良寛さんより五二歳年下です。

托鉢は一般の百姓、町人と接するために月に何度か行ったと思います。乞食

が第一の目的ではなかったと思います。

良寛さんはよそ家に上がり込んで話すことが好きです。みんな良寛さんと話すことが大好きです。

良寛さんが自分に課した「戒語」、「愛語」に基づいて話します。口数は多くなく相手の話を聞いて慈愛と寛容に満ちた話をします。みんな心が温まる気持ちになり、家内でもめごとがあった家でも良寛さんが帰った後解消したそうです。

良寛さんの文芸は自分の思いや考えを文章だけでなく漢詩、和歌などで相手に伝える方法に使います。売って銭を得るために作りません。

喜捨への礼状に添えて、又もらった和歌への返歌が主です。頼まれて断り切れずに作る時もあります。

これらが送られた人や関係者によって編集されて残っています。

良寛さんへの知識人の評価についてです。

良寛さんの生存中は江戸では一部の人を除いてほとんど知られず、越後に限って名僧として高尚な文芸人（漢詩、和歌、俳句、書）として知識人、一般庶民からも尊敬されていました。

良寛さんが全国的に高い評価を得られるようになったのは大正時代になって相馬御風（そうまぎょふう）による伝記「大愚良寛」が発表されてからです。

それ以降今日まで多くの専門家や一般の人がファンになりました。

多くの伝記や解説書が多数出版されてきました。

もちろん文芸作品のすばらしさが再評価されたこともありますが、僧としても高い評価です。

以上

二〇二五年九月一五日

梅　一声

良寛さんの越後（新潟県）関係略図

# 愛語

愛語ト云ハ　衆生ヲ見ルニ・マヅ慈
愛ノ心ヲオコシ　願愛ノ言語ヲ　ホ
ドコスナリ　ホヨソ暴悪ノ言語ナキナリ
世俗ニハ安否ヲトフ礼儀アリ　佛道
（道）ニハ　珍重ノコトバアリ　不審ノ孝行
アリ　慈念　衆生　猶如赤子ノオモヒ
ヲタクハヘテ言語スルハ愛語ナリ　徳ア
ルハ　ホムベシ　徳ナキハ　アハレムベシ　愛語ヲ
コノムヨリハ　ヤウヤク愛語ヲ増長スル
ナリ　シカアレバ　ヒゴロシラレズ　ミヘザル愛
語モ現前スルナリ　現在ノ身命ノ存
スルアヒダ　コノンデ愛語スベシ　世々
生々ニモ不退轉ナラン　怨敵ヲ降伏
シ　君子ヲ和睦ナラシムルコト　愛語ヲ
本トスルナリ　向テ愛語ヲキクハ　ヲモテヲ
ヨロコバシメ　コヽロヲ楽シクス　向カハズシテ
愛語ヲキクハ　肝ニ銘ジ　魂ニ銘ズ　シル
ベシ　愛語ハ愛心ヨリオコル　愛心ハ慈
心ヲ種子トセリ　愛語ヨク　廻天ノカラ
アルコトヲ學スベキナリ　タヾ　能ヲ賞ス
ルノミニアラズ

沙門良寛謹書